

土塔の弁天・土塔塚

むかし、むかし、平安時代の初めの頃、弘法大師が、二荒山へ向かう途中、川辺の里に泊まったと。その夜、夢の中に弁天様が現れて、「我は、百々塚権現の近くの池に住む白蛇である。池のほとりに、弁財天をまつるがよい。どんな日照りにも豊かな水を与えよう。誓いのしるしに、片葉のヨシを茂らせておこう。」と告げたと。

あくる日、弘法大師は、百々塚の里を訪ねたと。そこに、片葉のヨシが生えている広い池があった。錫杖の石突きで、池の水をかき回すと、白蛇がうねうねと動くのが見えた。昨夜の夢は、正夢だった。そこで、弘法大師は、村の人たちにすすめて、弁財天をまつらせた。

この日、弘法大師は、百々塚権現の社にこもって、五穀豊穡を祈願した。その時、次のような歌をよんだと。

みたらしのなさけにもどれ人ごころ
神のうけひく民ぞ榮えん

池には、おびただしい数の羽虫の群れが、竜巻のように、渦巻き立っていたと。村の人たちは、口々に、「羽虫が沢山わいて、作物を荒らすので困ります。どうか、助けて下さい。」と弘法大師にお願いしたと。

そこで、弘法大師は、村の人たちに、「池を汚すから羽虫もわく。まず池を綺麗にせよ。」と命じた。

村の人たちがゴミを拾い集め、池の水が澄んだ時、弘法大師は、錫杖を鳴らして祈った。すると、一団の羽虫が雲のように飛び去っていったと。村の人たちが、その後を追うと、羽虫が山のように積み重なって死んでいた。

それを見て、弘法大師は、「この上に、塚を築け。」と言ったと。羽虫の害をまぬがれた村の人たちは、大喜びで、もっこをかついで、土を運んだ。もっこ百杯運んだだけだったが、弘法大師の法力の助けで、一日一夜のうちに大きな塚が出来あがったと。

もっこ百杯の塚だから、十かける十で、十十塚と呼んだ。それが訛って、土塔塚になったと。

おしまい。